



この曲は、「天使の誘惑」「雲に乘りたい」などとともに、彼女の代表作とっていいだろう。「夕月」でデビューしたときは、演歌の新人だとばかり思っていたが、すぐにJ-POP風の歌謡曲を唄いだした。心配するほど短いミニスカート姿で、身体をくねらせて踊りながら唄うのだが、見かけと違ってその歌唱力は素晴らしかった。なかでもこの曲は、文学的な雰囲気があり秀逸だ。

(愛しながら別れた 二度と逢えぬ...後姿淋しく 霧の/窓の灯りともして あの人を待つので/花の色もやさしい故郷をはなれ) などのフレーズが心地よく、とどかぬ想い、結ばれるあてのないゆらぎ、などを映しだしてゆく。

静かめのポップス風歌謡曲なのだが、叙情歌のように品がよく哀愁が深い。この男は、なぜ村を出ていったのか。映画「ひまわり」では、男は別な場所にすでに家庭を作っていたが、この唄のなかの男は、いつの日か帰って欲しいものだ。

(収集プロフィール)

黛ジュン (まゆずみじゅん 1948～) 歌手、女優。東京都調布市出身。1960年代を中心に、独特のパンチの効いた魅力的な歌声でヒットを飛ばし、現在も活躍している歌手である。実兄は作曲家の三木たかし。

48年、東京生まれ。中学卒業後、米軍キャンプを廻りながら歌手としての素地を磨き、64年に本名の渡辺順子でレコード・デビューするが、全く話題にならなかった。しかし黛ジュンと改名し、ミニ・スカートをトレードマークに67年「恋のハレルヤ」で再デビューを果たしてからは快進撃が始まる。流行のGSを取り入れたサウンドにのって、小柄な体に似合わずパンチの効いた歌唱を聴かせ、若者中心の人気を獲得。翌年の「天使の誘惑」は日本レコード大賞を受賞すると共に、80万枚もの売り上げを記録した。その後人気は低迷するが、80年には映画のイメージ・ソング「風の大地の子守唄」が久々にヒット。

83年に三越事件をモデルにしたポルノ映画『女帝』に主演し話題を呼んだ。現在はディナー・ショーを中心にステージ活動を続けている。

また私生活では恋多き女としても有名で、2回の離婚を経たうえ、最近では作詞家の里村龍一と入籍から2ヶ月で破局し、ワイドショーを騒がせた。

概略

中学卒業後、本名で各地の米軍キャンプにジャズ歌手として巡る。1964年に渡辺順子の名でデビューもヒットせずに、1967年に黛ジュンと改名して「恋のハレルヤ」でレコード会社を変えて再デビュー。ミニスカートと共に、パンチの効いた歌声が話題となり、一気に注目を集める。1968年にリリースされた「天使の誘惑」はさらに大ヒットとなり、その年の日本レコード大賞に輝いた。1967年～1968年の2年間で、レコード売上が500万枚を記録。

1970年代になると低迷するものの、1980年には「風の大地の子守唄」(映画「象物語」の主題歌)が久々のヒット。さらに、1983年にはにっかつロマンポルノ『女帝』にも出演し、話題となる。現在では、舞台やショーを中心に歌手として活躍している。

また近年、1960年代の曲が再評価されている。1970年に東京サンケイホールで開かれた「リサイタル70」などが2005年にCD化され貴重な音源が聞くことができる。洋楽のメドレーは正確な英語と日本的なヴォーカルで、下積み時代に米軍キャンプで鍛えられたと思われるなかなかのセンス。当時の人気の理由がうなずける。

シングル

「夕月」

「恋のハレルヤ」（売上70万枚）

「霧の彼方に」

「雲にのりたい」

「天使の誘惑」（売上80万枚）

「土曜の夜何かが起きる」

映画

「天使の誘惑」（同名ヒットソングの映画化）

「夕月」（同名ヒットソングの映画化）

彼女の曲では、「私は忘れない」が、一番知られているであろう。北国の 青空に さよならを、という出だしの。確かに、覚えやすく、爽やかさと、思い切りのよさがある、いい曲である。しかし、私の思い出の曲はこちら。この唄が、メディアからよく流れていた頃、私は、あれこれと、悩みのデパートのように、毎日、悩んでいた。静かな日々を望んでいるのに、底意地の悪い人たちにいびられ、たくさんの人に注視されつづけ、経済的にも余裕がなく、といった、最悪の日々を生きていた。私のような、ナイナイ尽くしから、なおも自分たちのメリットを、しぼり出しつづけるという、アップレな根性には、心底、驚嘆していた。そんなつらい日々、わずかに潤いを与えてくれたのが、この曲である。

コーヒーもブラックが好きになり---/ひとり旅路の 道すがら いまはまた悲しみにふさぎ込み
あの川に逢いたいと ふと思う

(収集プロフィール)

岡崎 友紀〔おかざき ゆき・1953～ 〕女優、歌手。東京都台東区出身。日本大学芸術学部中退。

経歴

幼少のころよりバレエを習い、小学生時代には東宝芸能学校・児童科でレッスンを受ける。最初は子役として舞台やテレビに出演し始め、「王様と私」「屋根の上のバイオリン弾き」等のブロードウェイミュージカルの日本初演に起用される。

岡崎は、幼少時よりバレエや日舞を習い、64年には子役としてミュージカル『アニーよ銃をとれ』でデビュー。数年間に渡りブロマイドの年間売上で1位を独走するなど、まさに一世を風靡したアイドルといえる。

さて、そんなアイドル女優としての印象が強い岡崎だが、今日的な観点からすれば、むしろ注目すべきは歌手としての活動の方である。

1970年に「しあわせの涙」でデビュー。その後、ブロマイドの売上ほどの大ヒットには恵まれなかったものの、バート・バカラック作「I'll Never Fall In Love Again」のような雰囲気をもつ前述のドラマ主題歌「おくさまは18才」(70年)や、フィフス・ディメンションの「Up-Up And Away(邦題:ビートでジャンプ)」を下敷きにした和製ソフト・ロックの名曲として近年再評価された「風に乗って」(73年)、めくるめくメロディの展開と秀逸なリズム・アレンジが冴えるクロスオーバー歌謡「愛々時代」(74年)など、ポップな佳作を多く残している。また、オリコン最高21位のヒットとなった「私は忘れない」(72年)や「さよならなんて云わないで」(73年)など、70年代の筒美京平作品を語る上で外せない名曲もある。――楽曲の良さはもちろんのこと、岡崎のファルセットを活かしたポップなヴォーカルも魅力的だ。南沙織が竹内まりやと同様のアメリカン・ポップスの影響下にある普遍性をもったシンガーであったなら、岡崎のヴォーカルのポップさは、今日における野宮真貴のそれに類似したカラフルな印象がある。

その後、司会などのタレント活動が中心となり、ソニーの御曹司との結婚・離婚を経て、80年に加藤和彦のプロデュースにより歌手としての復活を印象づけたヒット曲が、最近キタキマユガリ

メイクした「ドゥ・ユー・リメンバー・ミー」なのであった。

1968年にはNHK大阪製作の少年少女向け連続ドラマ「あねいもうと」に妹「とし子」役で一年間主演し（姉役は西尾三枝子）、全国的な知名度を得、翌1969年にはさらに活躍の場を広げ、多くのドラマやバラエティ番組に進出。1970年3月には歌手デビューを果たした。

とりわけ1970年9月よりTBS系で放送された、高校教師と女生徒との秘密の結婚による騒動を描き大ヒットした学園ラブコメディ「おくさまは18歳」（最高視聴率33.1%）でキュートなコメディエンヌとしての魅力が開花し、1970年代前半から中盤にかけて国民的アイドルとして絶大な人気を博した（当時人気のバロメータだったブロマイドの売り上げが53ヶ月連続首位を記録。「アイドル」という言葉や概念が一般化したのは、同学年の吉沢京子と岡崎の時代からと云われている

。「おくさまは18歳」の大ヒットにより、「なんたって18歳!」「ママはライバル」等一連の「岡崎友紀18歳シリーズ(ライトコメディシリーズ)」が製作され、人気シリーズとしてテレビドラマの歴史に一時代を画した。

さらに作詞の才にも恵まれ、18歳シリーズの主題歌を始め多くの曲を「岡崎友紀」または「おくさまは18歳」の役名「高木飛鳥」のペンネームで作詞している。

1978年にソニー共同創業者盛田昭夫の長男盛田英夫と結婚するが、1981年に離婚。1986年にミュージシャンの岩倉健二と再婚したが、2005年に再び離婚した。

1991年には倒産したタレント養成所の生徒を引き受け、劇団「NEWS」を結成し、2000年にかけて若手俳優の指導育成に当たる。自ら脚本・演出・振り付けを手掛けた定期公演の舞台は、環境問題をテーマにしたメッセージ性の強い大胆な内容で、毎日新聞、読売新聞等の社会面で取り上げられ話題を呼んだ。

その後もタレント・舞台女優として精力的に活動している。また「岡崎友狸（ゆうり）」の雅号を持つ書道師範でもあり、環境保護活動にも積極的に取り組んでいる。

岡崎はアイドル時代は熱烈な「スヌーピー」ファンとしても知られ、「あねいもうと」で共演した桂三枝にプレゼントされたスヌーピーの縫いぐるみを肌身離さず持ち歩いていた。趣味は写真・ホエールウォッチング・プロ野球観戦等。また昔から大の動物好き、旅行好きである。

舞台

1961年 ミュージカル「ピーターパン」（東宝芸能学校公演）

1963年 「そばかすまり子の恋物語」本格的デビュー

1964年 ミュージカル「アニーよ銃をとれ」（ジェッシー役=日本版オリジナルキャスト）

1965年 ミュージカル「王様と私」（チュラロンコン皇太子役=日本版オリジナルキャスト）

1967年 ミュージカル「屋根の上のバイオリン弾き」（五女ビルケ役=日本版オリジナルキャスト）

1974年 ミュージカル「あしながおじさん」主演

1975年 「ビルマの豎琴」

1975年 ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」（長女リーズル役）

1976年 ミュージカル「ザ・ウィズ オズの魔法使い」主演

1977年 ミュージカル「魔女はロックがお好き」主演
1977年 「じょっぱり」主演
1978年 「風見鶏」（NHK連続テレビ小説の舞台化）主演
1978年 「坊ちゃん」
1978年12月 岡崎友紀ドラマチックショー
1979年 ミュージカル「王様と私」（タップチム役）
1980年 ミュージカル「屋根の上のバイオリン弾き」（次女ホーデル役）
1981年 「海鳴りやまず」
1984年 ミュージカル「リトル・ショップ・オブ・ホラーズ」（オードリー役）
1985年 ミュージカル「キス・ミー・ケイト」
1987年 「ボーイング・ボーイング」（ジャクリーヌ役）
1989年 「夢千代日記」（小夢役）
1997年 ミュージカル「モンスターネットカフェ」
1999年 ミュージカル「夢があるから!」主演
2001年 ミュージカル「眠れる森の美女」
他多数。

テレビドラマ

1966-67年 NHK「太陽の丘」テレビドラマ初出演
1968-69年 NHK「あねいもうと」テレビドラマ初主演
1969年 TBS「胡椒息子」
1969-70年 CX「お嫁さん・第7シリーズ」
1970年 TBS 木下恵介アワー「あしたからの恋」
1970-71年 TBS「おくさまは18歳」主演
1971-72年 TBS「なんたって18歳!」主演
1972年 NTV「3丁目4番地」
1972年 NTV「だから大好き!」主演
1972年 NTV「小さな恋のものがたり」主演
1972-73年 TBS「ママはライバル」主演
1973年 CX「お嫁さんに決めた!」主演
1973年 NET 女・その愛のシリーズ「野菊の墓」主演
1973-74年 TBS「ラブライバル」主演
1974年 TBS「ニセモノご両親」主演
1975年 YTV「野わけ」
1976-77年 THK「あかんたれ」
1978年 THK「続あかんたれ」
1979年 TBS「熱愛一家・LOVE」
1981年 NHK 銀河テレビ小説「復活」

1982年 NTV 火曜サスペンス劇場「ある青春の挽歌」

1983年 TBS 「水戸黄門 第13部」 第22話「復讐化け猫騒動・佐賀」 お縫役

1992年 CX「アルファベット2/3」

他多数。

バラエティ番組・音楽番組

1969年 NHK「おたのしみグランドホール」 司会

1969年 TBS「ヤング720」 司会

1970-71年 NTV「巨泉・前武のゲバゲバ90分!!」

1971-72年 NTV「ゲバゲバー座のちょんまげ90分!」

1973年 NTV「ほんものは誰だ?!」

1974-79年 NTV「NTV紅白歌のベストテン」 司会

1974-78年 NTV「カリキュラマシーン」

1975年 NTV「それは秘密です!!」

CX「なるほど!ザ・ワールド」

CX「森田一義アワー 笑っていいとも!」 - テレフォンショッキングゲスト

TBS「テレビ探偵団」

CX「ライオンのごきげんよう」

NTV「午後は○○おもいッきりテレビ」

NTV「踊る!さんま御殿!!」

KTV「快傑えみちゃんねる」

他多数。

映画

1970年 日活「女もつらいわ」

1971年 東宝「おくさまは18才 新婚教室」 主演

1972年 松竹「初笑いびっくり武士道」

1976年 東宝「おしゃれ大作戦」

レコード・CD

1970年 「しあわせの涙」「花びらの涙」「鳩時計は唄わない」

1971年 「雲と渚と青い海」「天使はこうして生まれるの」

1972年 「ファースト・ラブ」「黄色い船」「私は忘れない」（岡崎友紀最大のロングセラーヒット。特に関西ではベスト5にランクされた）

1973年 「さよならなんて云わないで」「白い船で行きたいな」「風に乗って」

1974年 「愛々時代」

1975年 「北上川」

1976年 「Good luck and good-bye」

1977年 「恋のマリオネット」

1978年 「ダンシング・レディ」

1980年「ドゥー・ユー・リメンバー・ミー」（最初YUKI名義で発売されヒット後岡崎友紀であることが公表された）後にribbon、キタキマユ、木村恵子、金月真美、水瀬伊織がカバー。

1981年「S-O-O-N」

2002年「NEVER ALONE」

他多数。

著作

「明日のスケッチ」（近代映画社）1973年、（集英社文庫）1977年

「続・明日のスケッチ」（近代映画社）1975年、（集英社文庫）1978年

写真集「ホエールソングーアラスカにザトウクジラの愛が泳ぐ」2003年

華の昭和名歌300 第 100 号 : 川は流れる 仲宗根美樹

プロの歌手ならば、誰が唄っても、名曲といえる曲だ。しかし、やはり仲宗根が、いちばんいい。高音とハスキーが、違和感なく同居している。この曲にとって、とても重要な、声がかすれるような部分も、実は高度なテクニックが必要なのだ。

病葉を 今日も浮かべて 街の谷 川は---ささやかな 望みやぶれて 悲しみに染まる瞳に 黄昏の 水のまぶしさ

哀愁にみちた、流れるようなメロディー。密やかな、悲しみ。内容からいって、これからも日本人に、愛され続ける唄であろう。

(収集プロフィール)

仲宗根美樹(1944-)は、東京出身の歌手。1971年に、引退。2000年、復帰。
1963頃 川は流れる (作詞:横井弘 作曲:桜田誠一)

*ほかに「雨の花園」などのヒット曲がある。

扇は、大ヒットした「新宿ブルース」が代表曲であるが、中ヒットしたこの曲のほうが、彼女らしい歌唱がより感じられる。内容的には、古めかしくも、恋人から身をひく女の物語である。扇の、上擦りかけた、甘く切ない声が、ストーリーにピッタリはまって、ふと人生の深みに、私たちを誘う。

儼とじても 貴方がみえる 思い切れない その顔が 赤い夕陽の---/せめて私を 忘れずい
てね---波をみつめて ああ ゆく私

(収集プロフィール)

扇ひろ子(おおぎ ひろこ、19xx~) 広島県出身の歌手。

扇ひろ子と聴いてピンとくる方はかなりの年配だろうが、平成の今もコンスタントに作品をリリースしているようだ。メロディは戦後の昭和歌謡そのものだが、むやみにコブシを利かさないうストレートな歌い方、時代のすうせいによるものか。

どこことなく捨て鉢なところがその歌声にあった扇ひろ子だが、年季が入ったせいか彼女の往年のヒット曲にしてからが、苦笑い気味の歌唱に聴こえてしまう。今の彼女は、京山幸枝若とは一味も二味も違った女としての貫禄ヴォーカル。

*1964年、赤い椿の三度笠(シングル)でデビュー。

主な曲

1965年 哀愁海峡(詞：西沢爽 曲：遠藤実)

1967年 新宿ブルース

1968年 みれん海峡

1998年 べらんめえ女傘

主な出演作品

哀愁海峡 新宿ブルース みれん海峡 浪花の大将 ~侠客列伝入り~会津の小鉄 明日は他人
差し向かい あなたに出会って べらんめえ女傘

【舞台】

恋ひとひら なべおさみ公演

【映画】

さそり 昇り竜鉄火肌

特技 ゴルフ 手話

1970年、発売。「京都の恋」と共に、代表作。ベンチャーズの軽やかなメロディーに乗って、切ないかつての恋物語が、京都の名所を舞台に回想される。ほのかな哀愁と、ヒロインの、儚げで控えめなスタンスも快い。

あの人の姿 なつかしい 黄昏の河原町 恋は---別れのつらさ 知りながら 遠い日は 二度と 帰らない 夕焼けの桂川

(収集プロフィール)

渚 ゆう子 (1945-) 日本の歌手。大阪市浪速区出身。ハワイアン歌手としてレコードデビューの後、ベンチャーズ作曲・演奏の「京都の恋」を日本語の歌詞で唄って大ブレイクし、一躍人気歌手となった。

45年、大阪府に生まれる。両親が沖縄出身のため、幼い頃より沖縄民謡を歌い、高校卒業とともに"九葉真鶴"の芸名で琉球舞踊の踊り手に。しかし和田弘(マヒナスターズ)に見い出され上京、名前を"渚ゆう子"と変えハワイアン歌手として活動した後、67年「早くキスして」でデビューを果たす。ブレイクのきっかけは、ベンチャーズ・ナンバーである「京都の恋」と「京都慕情」(どちらもインストだった)に歌詞を付けてレコード化するという企画で、その歌い手として抜擢されたことによる。しっとりとした大人の女の魅力ムンムンの歌唱により、どちらの曲も大ヒットを記録。71年には「さいはて慕情」で紅白歌合戦にも出場し、名実ともに頂点を極めることになる。

81年に芸能界を引退し、家業であるお好み焼き屋を継いだ。95年には「北ホテル」で復帰。現在では老父の介護の合間に、無料のカラオケ教室も開いたりして、悠悠自適ライフを送っている。

*近況は、各地のディナーショーなどに出演。老人ホームのボランティア慰問なども行っている。

経歴

両親が沖縄生まれであり、小さい頃から沖縄民謡と琉球舞踊を習い覚えた。

1964 芸能界入り。

1965 マヒナスターズの前唄で出演。そのとき、和田弘のすすめがあり上京。作曲家浜口庫之助に師事。ハワイアンを覚える。

1966 「渚ゆう子」に改名。(名付け親は、マヒナの松平直樹)

1967 ハワイアン歌謡「早くキスして」でレコードデビュー。

1970 ベンチャーズの「京都の恋」「京都慕情」を日本語の歌詞で唄って大ヒット。

1971 筒美京平作曲の「さいはて慕情」でレコード大賞歌唱賞。NHK紅白歌合戦に初出場。

1972 「風の日バラード」でNHK紅白歌合戦に二回目の出場。

1981 (第一線から一時引退)

1993 北ホテル

1997 京都ひとり

高度な歌唱力については、誰もが認めることであろう。幅広く童謡をこなし、オリジナルの歌謡曲も、7、8曲の名作がある。この曲は、ありふれた日常のなかに、深い苦渋を忍ばせ、けれどほのかに未来への希望も漂わせた、私小説のような名曲である。

今あなたは目ざめ 煙草をくわえている 早く起きてね---/アアあなたと別れた今でも アア私は今でもあなたと 生きているの---

(収集プロフィール)

由紀 さおり (ゆき さおり、1948-) 群馬県桐生市出身の歌手及び女優、ナレーター。洗足学園第一高等学校卒業。姉は安田祥子。姉とシンガー・ソング・コメディアンを自称 (正しくはシンギング・コメディエンヌ)。

経歴

日本を代表する童謡歌手。お馴染みの由紀さおり・安田祥子は、親から子へと受け継がれていく童謡や愛唱歌をより多くの人々に聴いてもらいたいと願い、国内のみならず海外においても公演活動を行う。そして、姉妹の抜群の歌唱力/ハーモニーは国境も世代も越え、幅広い層から支持を得ているのだ。

誰もが幼少期に慣れ親しんだ旋律と、温かい母性愛に満ち溢れた優しい歌声は、郷愁を誘い疲弊した心を潤します。少女時代から姉の安田祥子と共に本名の「章子」名義で童謡歌手として活躍。1965年にキングレコードから「ヒッチハイク娘」(安田章子名義)で歌手デビューを果たすも、まったくヒットせずしばらく停滞の時代に入るが、1969年再起をかけた「夜明けのスカット」が当時の深夜番組でBGMとして使用されたことを機に大ヒットし、最終的には150万枚のミリオンセラーとなり、この年NHK紅白歌合戦にも初出場を果たす。その後も「手紙」「生きがい」「故郷」「ルーム・ライト」「挽歌」「ふらりふられて」「トーキョー・バビロン」などの優れた歌謡曲を世に送り出し、その確かな歌声は「酔い覚ましの清涼剤」との評価を受ける。1973年には「恋文」で日本レコード大賞最優秀歌唱賞を受賞した。

1980年代になると、主にテレビ司会者・女優・タレントとしての活躍が目立ち、彼女のマルチな才能が一気に開花した。1983年には松田優作主演の『家族ゲーム』でお惚けな母親役を好演し、日本アカデミー賞助演女優賞を受賞、1987年には朝の連続テレビ小説『チョッちゃん』で主人公の母親役を演じ、流暢な方言を披露し話題となった。

かつてフジテレビ系列で放映された『ドリフ大爆笑』などでは、ザ・ドリフターズとコントで共演することが多かった。その中で、ドリフメンバー(とくにいかりや長介)からはお笑いの「いろは」を数多く学び、ドリフの番組の中では沢田研二や研ナオコらと同様に、ゲスト歌手としては珍しくコントの「オチ」を任されることもしばしばあった。

また1995年から2006年にかけて、NHKの『コメディーお江戸でござる』(のち『道中でござる』)でも準レギュラーで出演し、芸人顔負けのコメディエンヌぶりを披露した。

1985年より姉・祥子と共に童謡コンサートをスタートさせ、徐々に歌手活動に再び重点を置くようになる。1986年には童謡アルバム『あの時、この歌』を発表し日本レコード大賞企画賞を受賞

。童謡ブームの火つけ役となる。現在も各地で精力的にコンサートを行うと共に、近年では再び女優・タレントとしての側面が注目され始めている。

主な曲

夜明けのスキヤット（1969.03）

オリコンシングルチャート史上最も歌詞が短い1位曲でもある。

天使のスキヤット（1969.07）

枯葉の街（1969.10）

手紙（1970.07）

生きがい（1970.11）

この愛を永遠に（1971.03）

男のこころ（1971.07）

初恋の丘（1971.11）

故郷（1972.07）

りんどうの花（1972.12）

ルーム・ライト<室内灯>（1973.03）

『襟裳岬』（歌：森進一）と同じく吉田拓郎（作曲）・岡本おさみ（作詞）コンビの作品。

恋文（1973.08）

春の嵐（1974）

挽歌（1974）

季節風（1975）

さよならの走り書き（1975.04）

慕情（1975.09.05）

かたちばかりの幸福（1976.03.05）

つかの間の雨（1976.05.20）

こころもち 気まぐれ（1976.09）

ふらりふられて（1976.12.20）

う・ふ・ふ（1977.05）

ガラスの日々（1978.06.05）

トーキョー・バビロン（1978.09）

愛を切り札にして（1979.03）

愛したもうことなかれ（1979.09）

たそがれタペストリー（1980.02.05）

男ともだち（1980.05）

悲しい悪魔（1980.11）

両国橋（1981.05）

渥美地方の子守歌（1981.11）

アデュー（1982.04）

シングルナイト (1983.06.21)

このままがいいの (1984.)

木遣り育ち (1985.06)

お先にどうぞ (1987.04.21)

ゆらゆら (1988.10)

味の素CMソングとして使用された。

心の家路 (1988.10)

ラジオ深夜便内のコーナー「ないとエッセー」のジングルとして使用。

テレビドラマ

NHK

チョッチャん (1987年) - 北山みき 役

サザンスコール (1994年) - 杉野紀子 役

ファイト (2005年) - 駒田絹子 役

ハルとナツ 届かなかった手紙 (2005年) - 中山トキ 役

TBS

中卒・東大一直線 もう高校はいらない! (1984年)

ヤマダ一家の辛抱 (1999年) - 万代花代 役

日本テレビ

妻たちの課外授業 (1985～1986年)

サボテン・ジャーニー (2004年) - 長谷川姉妹の母 役

anego (2005年) - 野田厚子 役

ユウキ (2006年) - 米山先生 役

映画

こちら葛飾区亀有公園前派出所 (1977年)

家族ゲーム (1983年) - 沼田千賀子 役

早春物語 (1985年) - 大宅敬子 役

のぞみウィッチィズ (1990年) - 司葉遼太郎の母 役

模倣犯 (小説) (2002年) - 栗橋寿美子 役

オペレッタ狸御殿 (2005年) - びるぜん婆々 役

青いうた～のど自慢 青春編～ (2006年)

魂萌え! (2007年)

歓喜の歌 (映画) (2008年) - 松尾みすず 役

この曲は、都はるみも、歌っている。都らしい味は出ているが、中村のほうは、潮の香りが漂う。力強い節回しと、荒い低めのコブシが、印象的な歌手である。この30年、メディアで見かけないが、引退したのだろうか。この曲に関しては、中村のほうが、優れている、といえるであろう。

土佐の荒波 ヨイショと超える 男 土佐っぽ 度胸船 よさこい ほにこい 逢いに来い
海が---胸に ちらつく 面影よ ほにこい よさこい----

(収集プロフィール)

中村 佳代子 (なかむら かよこ、19xx~) 演歌歌手。1970年前後に、かなり活躍した。中村の唄は、ラジオから、ときどき流れてきた。また、テレビ・雑誌などで、たまに見かけた。ただし、その後の消息が、ほとんど無いのだ。中ヒットが、2曲もあるというのに、資料もあまり残っていない。多分、結婚して引退したのだろう、と思うが。

*ほかに「北海育ち」が中ヒットした。

1964年、発売。演歌系歌謡曲に、よくある、人生の応援歌。その、代表的な唄の、ひとつ。ほかに、水前寺清子の「365歩のマーチ」、畠山みどりの「出世街道」など。

どこかに故郷の 香りを乗せて はいる列車の 懐かしさ 上野は---/挫けちやならない人生が
あの日ここから はじまった

歌詞の内容と、井沢の力強い歌唱によって、素晴らしい名曲となった。スノッブな人々からは、忌避される唄であろうが、日本人の大多数を占める、庶民クラスには、心を癒すとともに、重くどっしり、のしかかる唄。きわめて日本的な歌ではあるが、その内容は、全世界の人々に、ほぼ共感されるもの、とっていい。

(収集プロフィール)

井沢 八郎 (いざわ はちろう、1937年3月18日 - 2007年1月17日) は日本の歌手。青森県弘前市出身。

女優の工藤夕貴、元俳優でクラブDJの工藤正貴は実子。現妻は、声優の青羽美代子。

*上野駅に「あゝ上野駅」の歌碑がある。

来歴・人物

弘前のひとかどの名士宅に出生、同地では中学生の頃から歌唱力に定評があった。中学卒業後、歌手を目指して上京。1963年に「男船」でレコードデビューを果たす。第二弾の「あゝ上野駅」は井沢八郎の代表曲である同時に、戦後の世相を反映する代表曲となった。他に「男傘」「北海の満月」などのヒット曲がある。

伸びやかでハイトーンを特徴とする歌声に定評があり、晩年もショーやテレビ番組などで活躍していた。

私生活では料亭経営者の令嬢と結婚、長年連れ添い一男一女(女優工藤夕貴・DJ工藤正貴)を授かった。

しかし、1983年に交通違反の不出頭、1985年に高校生(16歳)との淫行で、いずれも有罪判決を下された上、隠し子の存在も明らかとなる。こうしたスキャンダルのため、一時、芸能活動ができなくなった。工藤夕貴・夫人とも不和となり初婚は平成元年に破綻。その後、縁があり交際を続けてきた青羽と平成5年再婚、逝去まで連れ添った。

2005年秋頃、体調不良を訴え検査の結果食道癌が見かり手術を受ける。2006年5月にはがんがリンパ節に転移。同年秋に再入院したが、2007年1月17日午後11時18分、食道癌のため死去。享年69。

奇しくも彼が亡くなった1月17日は娘・工藤夕貴の誕生日、晩年和解を果たした夕貴は実父の死に人目を憚らず悲嘆したことは記憶に新しい。

*東北地方からの集団就職者の愛唱歌としても知られるこの「あゝ上野駅」は1964年にリリースされ、爆発的なヒットを飛ばした。戦後日本の歴史に残る名曲として位置付けられており、2003年には上野駅の駅前に「あゝ上野駅」の歌碑が完成。多くの人の思いと共に、永くこの歌が刻まれることになった。

1970年、発売。この曲は、昔から巷で流れていたもの。それに、適当に歌詞をつけて、色々な人が唄っていた。それをメジャーで正式？にはじめて取り上げたのが、園まりなどが唄った「夢は夜ひらく」。リメイクの藤圭子の曲は、タイトルの頭に「圭子の」がつき、歌詞も、かなり異なるが、基本的には同じ曲だ。

雨が降るから 逢えないの 来ないあなたは 罪な---嘘と知りつつ 愛したの あなたひとり--

園まりの歌唱は、可愛らしく、緑川の歌唱は、かなり恨みを帯びている。藤の歌唱は、さらに恨みと凄みが深まり、まさに怨歌だ。いづれもヒットしたが、特に、藤のは大ヒットとなった。彼女はその後、5、6曲の、名曲を、生みだしている。時代の雰囲気、ぴったり合った唄、というのが、私の印象だ。

(収集プロフィール)

藤圭子(ふじけいこ、1951年7月-)は岩手県一関市生まれ、北海道旭川市育ちの演歌歌手。『怨歌』と呼ばれるような、夜の世界の女の感情を歌った暗く陰鬱な歌を、伸びやかに深々と超越的に歌い上げた。1960年代終わりから1970年代初めにかけて一世を風靡した「演歌歌手」。夫は音楽プロデューサーの宇多田照實で、娘はシンガーソングライターの宇多田ヒカル。また、元夫は演歌歌手の前川清。

幼いころから浪曲歌手の父、三味線贅女の母の門付に同行し旅回りの生活を送り、自らも歌った。17才の時にさっぽろ雪まつりのステージで歌う姿が、レコード会社の関係者の目に留まり上京し、歌手デビューする事になる。作詞家石坂まさをと組んで、ヒット曲を連発した。女性ハスキーヴォイスの先駆者青江三奈をもしのぐ、ドスの聞いた声は衝撃的であった。ファーストアルバム「新宿の女」は20週連続1位、間をおかず続くセカンドアルバム「女のブルース」は17週連続1位。計37週連続1位という空前絶後の記録を作る。そのヒットから、テレビアニメ『さすらいの太陽』のヒロインのモデルにもなった。さらに、次のような、オリジナルを超えるカバー曲がある。

「南国土佐を後にして」「赤と黒のブルース」「網走番外地」「唐獅子牡丹」「兄弟仁義」「明治一代女」「旅笠道中」「リンゴ村から」「ゴンドラの唄」など。

1974年、喉のポリープの手術を受け、かつてよりやさしい声になってしまう。引退と復帰を繰り返すうちに人気を失っていく。

今は歌手を引退して、夫が代表取締役を務めるU3MUSICの役員を務めている。そして娘の宇多田ヒカルの母として、宇多田の音楽活動の活躍を見守っている。

略歴

1969年 9月25日『新宿の女』でデビュー。

1970年『圭子の夢は夜ひらく』が40週連続1位を獲得76万枚売上げる大ヒット。日本レコード大賞大衆賞を受賞。NHK『紅白歌合戦』に初出場。

1971年 前川清と結婚。

1972年 離婚。

1979年 突然引退を表明し、アメリカ合衆国に渡る。

1981年 藤圭似子の名で再デビュー。

1982年 宇多田照實と結婚（再婚）。

1983年 長女、光（宇多田ヒカル、本名：宇多田光）を出産。

1984年 芸名を藤圭子に戻す。

1995年 夫照實と娘光（宇多田ヒカル）の3人で「U3」のユニット名でインディーズでレコードを発売。

*多額の現金没収

概要：2006年3月3日、ニューヨークのJFK国際空港にて米国司法省麻薬取締局により多額の現金（計約4900万円）を没収された事件。

藤のパスポートには、モナコ、フランス、香港、など及び日本への渡航歴が記されていた。

藤は当初、現金はギャンブルで得た金であり、過去2年間貸し倉庫に保管していたと述べた。米国司法省麻薬取締局は、現金が麻薬取引のために既に使われたか、あるいは使われる意図があったと結論、全額を没収した。2006年9月現在、現金の返却を巡り当局と係争中である。

主な曲

新宿の女（1969.9）最高位9位、作詞 みずの稔/作曲 石坂まさを

女のブルース（1970.2）最高位1位、作詞 石坂まさを/作曲 森川 登

圭子の夢は夜ひらく（1970.4）最高位1位、作詞：石坂まさを/作曲：曾根幸明*園まりの「夢は夜ひらく」のカバーであった。

命預けます（1970.7）最高位3位、作詞 石坂まさを/作曲 石坂まさを

女は恋に生きていく（1970.10）最高位7位、作詞 石坂まさを/作曲 石坂まさを

さいはての女（1971.2）最高位8位、作詞 石坂まさを/作曲 彩木雅夫

京都から博多まで（1972.1）最高位20位、作詞 阿久悠/作曲 猪俣公章